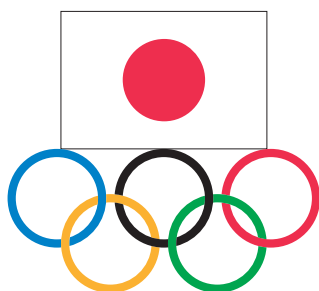


# JOC の進める オリンピック・ムーブメント



公益財団法人 日本オリンピック委員会  
JAPANESE OLYMPIC COMMITTEE



# 目 次

はじめに	1
前 文	2
オリンピック精神	4
<b>オリンピックの価値</b>	5
オリンピックの価値	6
オリンピック精神の教育的価値	7
JOCの使命	8
オリンピックに求められる役割	9
<b>日本のオリンピック・ムーブメントのあゆみ</b>	
オリンピック大会初参加	10
初の金メダルと女性選手の活躍	11
愛馬物語	12
友情のメダル	13
フジヤマのトビウオ	14
悲願のオリンピック大会開催	15
2度の冬季オリンピック大会	16
21世紀に入ってから活躍	17
<b>オリンピック・ムーブメントの推進</b>	
情報発信	18
・ JOC 公式ウェブサイト	
・ 広報誌「オリンピック」	
ふれあい活動	19～20
地域社会での活動	
・ オリンピックデーラン	

- オリンピックデー・フェスタ
- スポーツこころのプロジェクト
- スポーツ祭り

#### 教育現場での活動

- オリンピック教室

#### 家族対象の活動

- オリンピック親子チャレンジ

#### オリンピックアン対象の活動

- オリンピアン研修会

#### 文化プログラム ..... 20

- オリンピックコンサート
- 絵画 / 作文コンテスト

#### 国際総合競技大会関係 ..... 21

- 日本代表選手団結団式 / 壮行会

#### その他 ..... 21 ~ 22

- ラジオ番組「MY OLYMPIC」
- ジャーナリストセミナー
- 環境問題への取り組み
- 委員会 / 部会活動

#### 終わりに ..... 23

#### 年 表 ..... 24 ~ 26

### 関連資料

- オリンピック憲章
- 「JOC の将来にむけて」
- 2009 IOC オリンピック kongress 提言
- 「社会におけるオリンピック・ムーブメント」
- 「JOC Team Japan ポリシー・ステートメント」
- 「オリンピック学習読本」

---

---

---

---

---

# はじめに

日本が1912年のストックホルム（スウェーデン）オリンピック競技大会に初めて参加してから既に100年あまりが経ちました。日本オリンピック委員会（JOC）はオリンピック・ムーブメントの中で、新たな100年に向け歩みを進めています。

オリンピック・ムーブメントの理念はどのようなもので、オリンピック精神とは何を指すのか、またJOCの使命と役割はどのようなものか。節目の100年を経過し、わたしたちはあらためて確認する必要があると考えました。そうした普遍的な考え方、価値については、これまでともすれば難解な表現がされてきました。そのために多くの人の理解を得にくいという面があったと考えます。

今回、新しい指針を示すにあたり、わかりやすい表現で、丁寧に説明することに心がけました。教育的なものも含めオリンピックの価値について詳しく解説しています。さらにわが国のオリンピック・ムーブメントの歴史を代表的史実を交え振り返ることとしました。JOCの主導する国内のオリンピック・ムーブメントについても、具体的な普及活動を紹介しています。

公益財団法人 日本オリンピック委員会

## 前文 ～ピエール・ド・クーベルタンと嘉納治五郎～

19世紀の後半、イギリスをはじめ欧州各国、さらにアメリカ合衆国でスポーツ競技会が盛んに開かれるようになる。フランス人のピエール・ド・クーベルタン男爵（1863～1937）は教育改革を唱える中、特にイギリスでスポーツが教育の一環として重要な役割を担っている状況をつぶさに見て、刺激を受けた。

クーベルタンは若者が健康な肉体と健全な精神を持つことこそが社会の発展を促すとの信念を固め、古代ギリシャのオリンピック（紀元前776年～紀元393年）をモデルに近代オリンピックの創設に乗り出す。各国の若者が文化の違いを乗り越え、友好を深め、世界平和にもつながると信じて、1894年に国際オリンピック委員会（IOC）を設立し、その2年後にはギリシャの首都アテネで第1回近代オリンピック競技大会を開催した。

クーベルタンが唱えたオリンピックの理念を「オリンピズム」と呼ぶ。わが国では「オリンピック精神」と訳され親しまれてきた。オリンピック精神を推し進める運動が「オリンピック・ムーブメント」である。オリンピック・ムーブメントはIOCが主導し、国内では日本オリンピック委員会（JOC）が中心となって推進している。オリンピック・ムーブメントは、フェアプレーの精神と友情・連帯を大切にしながら平和な社会を築き、人類の調和の取れた進歩を導くことを理想としている。



1894年6月、クーベルタンの呼び掛けに欧州各国の有志がパリのソルボンヌ大学に集い、古代オリンピック競技大会の再興とIOC設立を決議



若き日のクーベルタン

一方、アジアで最初のIOC委員になった嘉納治五郎（1860～1938）は講道館柔道の創始者であると同時に、たぐいまれな教育の理論家であり実践家だった。理念に「精力善用 自他共栄」を掲げた。「精力」とは理想的な人間像、すなわち体と頭と心のそれぞれが調和を保ちながら高められた人間の総合力である。クーベルタンの考えとそっくりだ。

嘉納は、「精力」は善い行為として発揮されるべきであり、他者とともに向上を目指す「自他共栄」の精神こそ肝要であると考えた。柔道の対戦相手は打ち倒すべき敵ではなく、むしろ自らの向上にとって欠くこのできない存在、パートナーであると説いた。この境地にいたれば、相手に対する敬愛の念や感謝の気持ちがわくと唱えた。オリンピック精神の根幹でもある友愛や尊敬に通ずる嘉納の理念は平和な国際社会を築く上で、今日ますますその価値を高めている。



日本は1912年ストックホルム大会でオリンピック競技会に初参加。  
選手は陸上競技の三島弥彦と金栗四三の2人だった

# オリンピック精神

国際オリンピック委員会（IOC）は「オリンピック憲章」の中でオリンピック精神とはどのようなものか、また国内オリンピック委員会（NOC）の使命とは何かを定めている。

- オリンピック精神は、人間の体と頭と心の資質をバランスよく高めることを目指す哲学である。オリンピック精神が求めるのは、人間としてのより良い生き方であり、それは努力の内に見いだされる喜びと教育的な価値、そして社会的責任と他者への敬意に基づいている。
- オリンピック精神の目的は、人類の調和の取れた発展にスポーツを役立てることにある。また人間の尊厳を保つことを大切にし、平和な社会を築き推進することにある。
- オリンピック・ムーブメントは恒久的で普遍的な運動である。この運動は5大陸にまたがり、世界の競技者がスポーツの祭典であるオリンピック競技大会に集うとき、そのハイライトを迎える。シンボルは互いに交わる5つの輪である。
- スポーツをすることは人権の一つである。すべての個人は友情、連帯、そしてフェアプレーの精神に基づく相互理解を何よりも尊重するオリンピック精神にのっとり、いかなる差別も受けることなく、スポーツをする機会が与えられなければならない。
- スポーツが社会に溶け込む中、スポーツ団体はオリンピック・ムーブメントを進めるうえで、自身の権利と義務に敏感でなければならない。その権利と義務には競技規則を設けること、また組織の構成と運営にあたっては、いかなる外部の影響も受けることなく選挙を実施することなどが含まれる。
- 人種、宗教、政治、性、その他の理由による国または個人に対する差別はいかなる形態であれ、オリンピック・ムーブメントとは相容れない。



# オリンピックの価値

近代オリンピックの創設者、クーベルタンは人間の体と頭と心の資質を調和よく高めるには、スポーツと文化と教育の側面を持つオリンピック精神を広めることこそ重要であると考えた。国際オリンピック委員会 (IOC) は現在、オリンピック精神の中でも「卓越」「友情」「敬意/尊重」が3つの中心的な価値であると強調している。

IOCはさらに世界の若者がスポーツに興味を持つよう、そしてスポーツをするよう奨励している。同時に、オリンピック精神への理解を広げるため「オリンピック教育プログラム」を設けて、5つの教育的な価値を若者が心に留めて生活するよう促している。

JOCは創設者の嘉納治五郎がとなえて以来、スポーツにおける教育的価値の重要性については、IOCと同じ理解を共有している。オリンピック精神の教育的価値を若い世代に語り継いでいくことは極めて大切な活動である。



スイス・ローザンヌのIOC本部正面玄関

---

---

---

---

---

## オリンピックの価値

.....

### ●卓越 (Excellence)

スポーツに限らず人生においてベストを尽くすこと。大切なのは勝利することではなく、目標に向かって全力で取り組むことであり、体と頭と心の健全な調和をはぐくむことである。

### ●友情 (Friendship)

スポーツでの喜びやチームスピリット、対戦相手との交流は人と人とを結び付け、互いの理解を深める。そのことは平和でよりよい世界の構築に寄与する。

### ●敬意/尊重 (Respect)

互いに敬意を払い、ルールを尊重することはフェアプレー精神をはぐくむ。これはオリンピック・ムーブメントに参加するすべての人にとっての原則である。



## オリンピック精神の教育的価値

### ●努力から得られる喜び (Joy of Effort)

スポーツで自分自身の限界に挑み、相手に挑戦することで、若者は体力、行動力、知力をはぐくむ。

### ●フェアプレー (Fair Play)

スポーツを通じてフェアプレー精神を学ぶことは、社会においてフェアプレー精神に即して行動することを促す。

### ●他者への敬意 (Respect for Others)

さまざまな文化の中に生きる世界の若者が多様性を受け入れ、互いに尊敬することを学び平和的な態度をとるとき、平和と国際的な相互理解は促進される。

### ●向上心 (Pursuit of Excellence)

卓越したものに目を向けることは、若者に前向きで健全な選択を促し、同時に可能な限りベストを尽くそうとする努力の大切さを教える。

### ●体と頭と心のバランス (Balance between Body, Will and Mind)

学びは体全体で行われるものであり、単に頭で行われるものではない。身体的な活動は、道徳的かつ知的な学びを発展させる。



# JOCの使命

## 使命

JOCの使命はオリンピック憲章に従い、わが国のオリンピック・ムーブメントを発展させることにある。

## 主な役割

- オリンピック精神を広めるために、スポーツの発展とオリンピック教育プログラムの推進に努める。
- 優れた競技者が育つことを支援する。さらに子どもから高齢者まで幅広い年齢の人がスポーツに親しむことができるよう奨励する。
- スポーツの場での差別や暴力に反対する断固とした行動をとる。ドーピングの根絶に向け努力し、その世界的な活動に参加する。
- オリンピック競技大会やアジア競技大会など国際総合競技会に選手を派遣する。
- オリンピック競技大会の日本開催に立候補する都市を国内選定する。
- 組織の独立性を保ち、政治的、経済的なものを含めあらゆる外部からの圧力に対抗する。



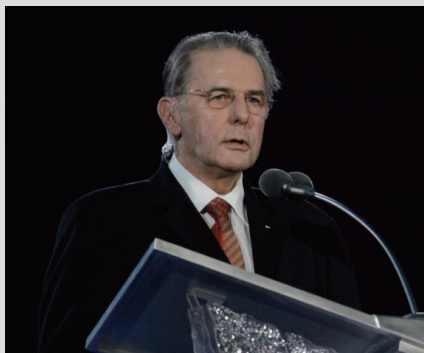
トーマス・バッハ第10代IOC会長（左）と竹田恆和第15代JOC会長による2013年の東京での記者会見

## オリンピックに求められる役割

日本を代表してオリンピック競技大会に参加する選手はその栄誉を自覚し、競技での活躍だけでなく社会生活のうえでも国民の期待にかなう行動が求められる。なぜならば、オリンピック代表選手は肉体と意志と精神のそれぞれの質をバランスよく高めた理想的なアスリートとして受け止められ、オリンピック精神を発揮する良い見本であると理解されているからである。

オリンピック競技大会に出場した選手（オリンピック）は大会出場で役割を終えるのではなく、その経験を生かし、オリンピック・ムーブメントに貢献し続けることが期待される。

～責任なくして栄光はない～



ジャック・ロゲ第9代IOC会長  
(在任2001～2013年)  
(2010年バンクーバー冬季オリンピック開会式でのスピーチ)

「選手諸君へ

この大会の主役はあなた方、選手だ。

あなた方のパフォーマンスと行動を通して世界の人々が希望を抱くことができるような大会にしよう。

皆さんには世界の若者の手本であることを自覚してほしい。

責任のない栄光は存在しない。」

# 日本のオリンピック・ムーブメントのあゆみ

わが国のオリンピック・ムーブメントは1909年、嘉納治五郎のIOC委員就任により本格的に始まった。100年を超える歴史の中で、オリンピックの理念はフェアプレー精神をはじめ社会に浸透してきた。また、オリンピック競技大会での日本選手の活躍は国民に感動を呼び起こし、勇気を与えている。オリンピック・ムーブメントを推進する上でそのよりどころであるオリンピック精神はわが国においてもさまざまな形で発揮されてきた。

## オリンピック大会初参加

～クーベルタンからの依頼～

明治維新後、日本にスポーツを伝え、広めたのはフレデリック・ウィリアム・ストレンジらの外国人教師だった。体操、陸上競技、ボート、野球、サッカー、スキーなどさまざまなスポーツが海を渡り入ってくると、学生たちはすぐに夢中になった。

1909年、講道館柔道の創始者で東京高等師範学校（現・筑波大学）の校長だった嘉納治五郎にオーギュスト・ジェラルド駐日フランス大使が面会を求めた。ジェラルドは母国のクーベルタン男爵から日本のIOC委員候補を推薦してほしいと依頼されていた。嘉納は元来、クーベルタン同様若者の教育には体育を含めることが欠かせないと考えていた。



日本初のIOC委員となった  
嘉納治五郎

嘉納はクーベルタンの厚意に感謝しIOC委員に就任すると、1911年にはオリンピック競技大会に参加するため、国内オリンピック委員会（NOC）の機能を持つわが国初のスポーツ統括団体、大日本体育協会を設立した。翌1912年のストックホルム（スウェーデン）オリンピック競技大会に日本は初めて陸上競技の三島弥彦（みしま・やひこ）、金栗四三（かなくり・しそう）の2選手を派遣した。

## 初の金メダルと女子選手の活躍

～女性指導者の先駆者でもあった人見絹枝（ひとみ・きぬえ）～

1916年ベルリン（ドイツ）オリンピック競技大会が第1次世界大戦により中止となった後、日本は2度目の参加となった1920年アントワープ（ベルギー）大会でオリンピックのメダルを初めて獲得する。男子テニスの熊谷一弥（くまがい・いちや）がシングルスで銀メダルを獲ったのに続き、柏尾誠一郎（かしお・せいいちろう）と組んだ男子ダブルスでも銀メダルとなる。

1928年アムステルダム（オランダ）大会では、陸上男子三段跳びの織田幹雄（おだ・みきお）が日本人初の金メダルに輝いた。また、日本の女子選手が初のオリンピックメダルを獲得したのもアムステルダム大会だった。人見絹枝が陸上800mで銀メダルとなり、日本のスポーツ史に新たなページを書き加えた。

人見は競技のかたわら新聞記者としても活躍した。海外遠征の経験や見聞をもとに記事を書き、各国の女性スポーツ事情を日本に紹介した。また女子選手の指導や講演に全国をかけ巡り、第3回国際女子競技大会への日本選手の渡欧にあたっては、自分の練習よりも資金調達を優先し奔走した。

オリンピック・ムーブメントで日本女性アスリートのフロントランナーとして活躍した人見は次世代を見据え、24歳の若さで亡くなる直前の新聞記事に次のように書いている。

<sup>なんじ</sup>「汝らに望むことは、代表選手の名譽を永久に保持してくれることと同時に渡欧4ヵ月に学び覚えた真の女性スポーツ精神を忘れず、母校の人々に郷土の人々にひいては日本の人々に、教えるだけの覚悟をもってほしいものである。」（1930年2月7日付大阪毎日新聞）



人見絹枝（左）

## 愛馬物語

～競技パートナー気遣い途中棄権～

1932年ロサンゼルス（アメリカ）オリンピック競技大会の総合馬術に出場した城戸俊三（きど・しゅんぞう）はエンデュランス（耐久）の終盤、残り2キロとなった地点で愛馬「久軍」の異変に気付く。馬は全身にびっしりと汗をかき、いかにも苦しうにあえいでいる。城戸はむちを当てゴールを目指そうと思ったが、考え直して馬から下りた。疲労こんぱいの中でなお走り続けようとする久軍を優しく押しとどめ、途中棄権を決断した。

久軍は19歳と馬としては高齢だった。城戸の決断は競技パートナーの愛馬が万が一の事態に陥ることがないように気遣ったものだった。大会後、米国人道協会は城戸の行為をたたえ、記念の銅版を鑄造した。



城戸俊三と久軍号



写真提供：秩父宮記念スポーツ博物館

米カリフォルニア州で保管されていた銅版の記念碑は1964年に日本に贈られ、城戸の使用した鞍とともに東京・秩父宮スポーツ博物館で展示された



## 友情のメダル

～健闘たたえ銀、銅メダルを半分に割り、つなぎ合わせる～

1936年ベルリン（ドイツ）オリンピック競技大会では、陸上男子棒高跳びの西田修平（にしだ・しゅうへい）と大江季雄（おおえ・すえお）が優勝争いに加わった。午前中に始まった競技は熱戦となり、雨がポツポツと降る中、終盤は夜間照明をつけて行われた。アメリカのメドウスが優勝を決めた後、3選手による2～4位決定戦に移った。

しかし、各選手の疲労が激しく、アメリカのセフトンの4位が決まった後、日本の2選手については、審判員が日本チームで順位を決めてはどうかと提案する。日本チームは順位決定戦に入る前の試技で同じ4筋 25ながら、1回目にクリアしていた西田が先輩だったこともあり2位、その高さを2回目にクリアした大江を3位としたいと回答し、その通り最終順位が確定\*した。

競技翌日の表彰式では、西田は後輩の大江に2位の表彰台に立つよう促した。「次の東京大会1940年（開催予定）で頑張ってもらいたい」との激励の気持ちからだったという。帰国後、2人は銀メダルと銅メダルをそれぞれ半分に割ってつなぎ合わせ、互いの健闘をたたえた。



左から西田修平、メドウス、大江季雄



「友情のメダル」。大江のメダル。

※当時は同記録の場合、試技数の少ない方を上位とするルールがなかった。

## フジヤマのトビウオ

～焼土から立ち上がった国民的英雄～

第2次大戦の敗戦と焼土から日本が立ち上がる中で、国民を勇気づけたのは競泳自由形長距離の古橋廣之進（ふるはし・ひろのしん）の活躍だった。16歳で終戦を迎えた古橋は間もなく日本大学のチームメイトと猛練習を開始する。乏しい物資、食料難にひるむことなく、1日3回ほとんどサツマイモだけの食事でも6時間2万m、ときには9時間3万mも泳いだ。

1948年のロンドン（イギリス）オリンピック競技大会に敗戦国日本は招待されなかった。そこで日本の水泳人は負けん気を発揮する。ロンドン大会の競技日程に合わせ同じスケジュールを組んで東京・神宮プールで日本選手権を開催、古橋はロンドン大会の優勝者の記録を上回るタイムで泳いでみせた。

翌1949年に日本競泳チームはアメリカ・ロサンゼルスでの全米水泳選手権に参加、古橋は1500mで「20世紀中は破られることはないだろう」とまでいわれた18分19秒0の世界新記録で優勝。リレーを含め4種目で世界記録を塗り替えた。地元メディアはその強さに驚き「フジヤマのトビウオ」とたたえた。

復興への光明がようやく見え始めた戦後日本の時代背景が、困難に立ち向かい、それを克服したシンボルとして、古橋を国民的な英雄に押し上げた。



現役時代のダイナミックな泳法



プールサイドでチームメイトの橋爪四郎（右）と談笑する古橋廣之進

## 悲願のオリンピック大会開催

～日本勢活躍、国民に大きな自信～

1964年10月10日、東京は雨上がりの晴天に恵まれた。航空自衛隊ブルーインパルスの一隊がその真っ青なキャンバスに5つの輪を描く。参加国・地域93、選手数は5,152人。ギリシャ・オリンピアで採火された聖火はアジア諸国の主要都市と日本列島をリレーされ、国立競技場の聖火台に点火された。1940年第12回大会の東京開催が決まりながら日中戦争のため中止となった日本にとっては、悲願のオリンピック競技大会開催だった。

柔道、バレーボールが初めて実施され、日本選手団は金16個を含む計29個のメダルを獲得、国民は熱狂した。女子バレーの日本対ソ連の決勝はテレビ視聴率が66.8%といまだに破られないスポーツ中継の最高記録となった。オリンピック開催はサッカーをはじめ多くの「日本リーグ」が誕生する契機となり、同時にスポーツの大衆化を促した。

オリンピック競技大会終了後、11月にパラリンピック競技大会が開催された。それまで国内では障がいのある人によるスポーツ大会に大きな関心が向けられることはすくなかったが、この開催が契機となり、日本の障がい者スポーツは徐々に発展していった。

また、大会開催に向け首都高速道路と東海道新幹線の整備が進み、東京はインフラの充実した世界的な近代都市として発展していく。戦後わずか19年でオリンピック競技大会を成功裏に開催したことは国民に大きな自信を与え、日本は経済大国への歩みを加速していった。



1964年10月10日、東京オリンピック開会式で航空自衛隊ブルーインパルスが青空に五輪を描く

## 2度のオリンピック冬季大会

～世界との交流進む～

アジアで初のオリンピック競技大会を1964年に東京で開催して間もなく、オリンピック冬季競技大会招致の機運が広がる。札幌大会は1972年に実現した。笠谷幸生のけん引するスキージャンプ「日の丸飛行隊」が70m級で金、銀、銅のメダルを独占、大会はわが国の冬季スポーツ全体を刺激し発展を導いた。

1998年には日本として2度目のオリンピック冬季競技大会を長野市で開催した。日本選手団は金5個を含む計10個のメダルを獲得する大活躍だった。国際オリンピック委員会 (IOC) は大会を支えたボランティアの活動を例に挙げ「最もよく組織されたオリンピック冬季競技大会だった」と評価した。

また、長野大会ではユニークなオリンピック教育活動が展開された。長野市内の小・中学校、特殊学校が大会開催に合わせて、参加各国・地域への理解を深め交流を進めることを目指し「一校一国運動」を展開した。各校は大会前には交流相手の国・地域の歴史と文化を調べ、手紙やビデオレターで友好のメッセージを発信した。大会中には交流国・地域の選手団入村式に参加し、選手を学校に招いて交流会も開いた。

一校一国運動は次の2002年ソルトレークシティ（アメリカ）冬季大会が受け継いだのをはじめ、多くのオリンピック開催都市が地域の子どものオリンピック教育と国際理解の機会ととらえ継承した。



長野市内の小・中学校、特殊学校は『1校1国運動』を展開。大会に参加した国・地域を応援し、趣向を凝らした歓迎やプレゼントを用意して交流を進めた

## 21世紀に入っの活躍

～近い存在としての選手～

21世紀に入り、日本は2004年アテネ（ギリシャ）オリンピック競技大会で金メダル16個を獲得、金メダル獲得ランキングの世界5位に躍進する。この好成績は、長年の懸案だった選手強化拠点ナショナル・トレーニング・センターの整備を促し、2008年北京大会前には施設が整い利用できるようになった。国による選手の支援体制はその後もさらに進み、2012年ロンドン（イギリス）大会では総メダル数で史上最多の38個を記録した。

IOCはロンドン大会を初の本格的「ソーシャルメディア・オリンピック競技大会」と位置付けた。若者を中心に多くの人が世界中で携帯端末を持ち歩く時代に入り、選手とファンがソーシャルメディアの利用によって結び付き、感動を共有する機会が飛躍的に広がった。選手が大会中も自身の感想をソーシャルメディアで発信する一方、選手の友人や知人、ファンは激励メッセージを送った。

活躍した日本選手は「多くの人に支えられた。温かい声援ほど勇気づけられるものはない」と語った。オリンピック選手と国民はかつてないほど、互いを近い存在とを感じるようになった。オリンピック精神がさらに国民に浸透する機運が高まっている。



東京・銀座で行われたロンドン・オリンピックのメダリストによるパレードには50万人の観衆が詰め掛けた

# オリンピック・ムーブメントの推進

## ～ JOCの各種活動～

子どもや若者がスポーツで汗を流す時間が多くの国で減少している。特に先進国でこの傾向が著しい。IOCは本格的なインターネット時代に入り、子どもや若者は電子的な画面に引きつけられる一方、身体的な運動から遠ざかっていると見ている。そうした危機感から2010年に14～18歳の選手が参加するユースオリンピックを創設、第1回大会をシンガポールで開催した。若い世代に対し、オリンピック精神の教育・啓発を力強く進めるとの決意の表明でもある。

目標に向かって努力する、チームメートと友情をはぐくむ、対戦相手や審判に敬意を払う、といったオリンピック精神の教育的価値は極めて高い。JOCはオリンピック・ムーブメントを前進させるため、若者への教育啓発活動、市民とのふれあい活動、情報発信などに積極的に取り組んでいる。

一方、オリンピック競技大会に関わる課題は時代とともに変化し多様になっている。自然環境にやさしい大会が求められ、ドーピングに厳格な姿勢で立ち向かうことも欠かせない。スポーツに関わる女性の意見を尊重し、男女平等を確立するための運動も進めなければならない。JOCはIOCと連携して数多くの課題に取り組み、明確なメッセージを発信していくことが期待されている。

### (1) 情報発信

#### ・ JOC公式ウェブサイト

JOC公式ウェブサイトに写真、テキスト、ビデオ映像を掲載しオリンピック・ムーブメントに関わるさまざまな情報を発信する。PC、スマートフォン、タブレット型端末の利用者に素早く情報を届ける。ソーシャルメディアを活用し、フェイスブック、ツイッターなどによる共感の輪が広がるよう、コンテンツ内容について配慮する。JOCの各種活動について紹介、PRする。

#### ・ 広報誌「オリンピアン」

年1回発行の雑誌型とデジタル版の2方面の機関誌。発行時



にタイムリーなJOCの中心的事業を紹介し、インタビュー記事も盛り込んで、オリンピックがより身近に感じられる内容を目指す。

## (2) ふれあい活動

### 【地域社会での活動】

#### ・オリンピックデーラン

オリンピックと一緒に参加するジョギングを中心とした一般参加型の触れ合いイベント。

地方自治体、特に都道府県体育協会と連携し、子どもから大人まで幅広い年齢層の参加者がスポーツする楽しさを味わう機会。



#### ・オリンピックデー・フェスタ

東日本大震災復興支援JOC「がんばれ!ニッポン!」プロジェクトの一環として、被災5県（青森、岩手、宮城、福島、茨城）の被災地を中心に、「スポーツから生まれる、笑顔がある」をスローガンに、スポーツを通じてオリンピックらが地域住民と交流する事業。



#### ・スポーツこころのプロジェクト

日本のスポーツ界が一丸となって、東日本大震災で被災した全ての子どもたちの”こころの回復”を支援するためのプロジェクト。青森、岩手、宮城、福島、茨城、千葉の6県の小学生にオリンピック・アスリートが夢先生として訪れ、授業を通して子どもたちにメッセージを伝えていく事業。



©スポーツこころのプロジェクト

#### ・スポーツ祭り

1964年の東京オリンピック競技大会を記念して制定された「体育の日」に文部科学省、日本体育協会などと連携して共催する、主に家族連れを想定した一般参加型イベント。オリンピックが子どもや家族と一緒に、さまざまなプログラムで見本を示しながら指導し、参加者にスポーツの楽しさ、体を動かすことの面白さを体験してもらう。



## 【教育現場での活動】

### ・オリンピック教室

学校教育と連携したオリンピックによる中学生向け授業。オリンピックが生徒に対して直接語りかけ、生徒がオリンピック精神の教育的価値への理解を深めることを目指す。



## 【家族対象の活動】

### ・オリンピック親子チャレンジ

オリンピックと親子が一緒に自然の中で様々なプログラムにチャレンジする。時間と空間を共有することで、参加者にオリンピックの体験談をより身近なものとして感じてもらい、オリンピック精神の教育的価値を再確認してもらう。



## 【オリンピック対象の活動】

### ・オリンピック研修会

オリンピックがオリンピック教室やふれあいイベントなどの活動をする際に、能力を十分に発揮できるよう、オリンピック精神の教育的価値などについて、意見交換などを通じ理解を深める機会とする。



## (3) 文化プログラム

### ・オリンピックコンサート

オリンピック競技大会の映像とクラシックコンサートを融合させた一般参加型イベント。エンターテインメントの要素を持ち、クラシック音楽ファンにとどまらず、日ごろからJOC活動を支援する関係者も招待する。必要に応じ海外のオリンピック関係者を招き、わが国のオリンピック・ムーブメントについて理解を深めてもらう機会とする。





## ・絵画/作文コンテスト

小学生から高校生までを対象としたIOC主催の文化プログラムの一環。優秀な作品をIOCに推薦し、IOCの選考を経て、入賞者を表彰する。



## (4) 国際総合競技大会関係

### ・日本代表選手団結団式/壮行会

JOCが選手派遣を担うオリンピック競技大会、ユースオリンピック競技大会、アジア競技大会、東アジア競技大会、ユニバーシアード競技大会などについて結団式と壮行会を開催する。



2014年ソチオリンピック冬季大会  
日本代表選手団結団式



2012年ロンドンオリンピック大会日本代表選手団壮行会

## (5) その他

### ・ラジオ番組「MY OLYMPIC」

JOCとの連携でジャパンFMネットワーク加盟各局が放送する5分間番組。オリンピックアンが出演し、過去のオリンピック競技大会での思い出や競技への取り組みについての考えを披露する。視聴者が選手をより親しみやすい存在として感じてもらえることを目指す。

### ・ジャーナリストセミナー

日本スポーツ記者協会との共催イベント。オリンピック競技大会をはじめ日本代表選手団を編成し参加する国際総合競技大会での報道・取材環境のあり方について、JOCと加盟各競技団体、メディアが年に1度意見交換し、認識の共有を目指す。選手にとっても、メディアにとっても理想的な取材環境とはどのようなものなのかについて考える貴重な勉強会。

### ・環境問題への取り組み

IOCの環境保全活動に倣い、各競技団体と連携し活動する。身近なところにある環境問題への意識を高め、スポーツと自然との共存について理解を深めるため、選手も参加するシンポジウムなどを開催する。

### ・委員会/部会活動

アスリートと連携し、セミナー、フォーラム等を開催する。



JOC 環境ポスター 2013



アスリート専門部会が中心となって開催した「アスリートフォーラム2012 ~アスリート発、オリンピック・パラリンピックの魅力~」メダリスト、リレートーク後の参加者写真撮影

---

---

---

---

---

# 終わりに

## ～さらなるオリンピック・ムーブメント発展のために～

オリンピック競技大会は今やスポーツの枠を超え、世界最大の社会的イベントとなりました。日本の多くの国民はオリンピックの理念がフェアプレー精神、あるいは世界平和の願いと結びついていることを理解しています。5つの輪が5大陸を表し、国際オリンピック委員会（IOC）のシンボルとなっていることについて、日本は世界のどの国よりもよく認識しているといわれます。

それでも、オリンピック精神、さらにオリンピック・ムーブメントとなると、どこか難しそうで、わかりにくいというのが一般的な受け止め方ではないでしょうか。この冊子ではオリンピック精神が社会に浸透するよう努める活動、つまりオリンピック・ムーブメントについて、わかりやすく説明し、同時に日本オリンピック委員会（JOC）の教育的活動の確認を目指しました。

IOCを創設したクーベルタン男爵の考え、IOCの定めるオリンピック憲章の理念、特にその教育的価値について、かみ砕いて説明し、日本のスポーツ史にオリンピック精神が輝いた瞬間が過去いくどもあったことを紹介すれば、人々の理解はこれまで以上に深まるのではないかと。そんな思いも冊子には込められています。

文武両道を尊重するわたしたちは、実は特別に意識することなく、オリンピック精神に通じる美徳を大切にしてきました。言うまでもなく、子どもと若者にとってスポーツは肉体と精神のバランスのよい成長を促すかけがえのない活動です。JOCの母体、大日本体育協会が創設されて100周年の節目だった2011年から、わたしたちは次の100年に向け歩みを進めています。

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催が決まり、国内のオリンピック・ムーブメントはさらなる発展の好機を迎えました。この冊子が将来への指針をわずかでも提供できれば幸いです。

# 年 表

西暦	主なできごと
1894	クーベルタン男爵の提唱により国際オリンピック委員会（IOC）が設立
1896	第1回近代オリンピックがギリシャのアテネで開催
1909	嘉納治五郎が第12次IOC総会（ベルリン）でアジア初のIOC委員に選出される
1911	オリンピック参加の母体として大日本体育協会が設立され、初代会長に嘉納治五郎が就任
1912	日本が第5回ストックホルム大会でオリンピックに初めて参加。代表選手は陸上短距離の三島弥彦とマラソンの金栗四三の2名
1916	ベルリンオリンピックが第1次世界大戦のため中止
1920	アントワープ大会で日本はオリンピックのメダルを初めて獲得。テニスの熊谷一弥はシングルとダブルス、柏尾誠一郎はダブルスでいずれも銀メダル
1924	第1回冬季オリンピックがフランスのシャモニー・モンブランで開催
1928	アムステルダム大会で陸上三段跳びの織田幹雄がオリンピック日本初の金メダルを獲得。一方、陸上女子800mで人見絹枝が日本女子選手としてオリンピック初のメダルとなる銀メダルを獲得
1936	第36次IOC総会（ベルリン）で1940年第12回オリンピック競技大会開催地に東京を決定
1938	第2次大戦につながる国際情勢悪化の中、日本は第12回東京オリンピック大会の返上を決定（同時に第5回札幌冬季オリンピックを返上）
1946	第1回国民体育大会が宝塚市ほか近畿各都市で開催

西暦	主なできごと
1948	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ロンドンオリンピックに敗戦国日本は招待されず</li> <li>• 古橋廣之進が競泳日本選手権で世界新記録を連発</li> <li>• 大日本体育協会が日本体育協会と改称</li> <li>• パラリンピックの前身、英国ストークマンデビル大会が開催され、障がいのある選手のスポーツ大会が発展する契機となる</li> </ul>
1952	ヘルシンキ大会で日本は戦後のオリンピックに復帰
1959	第56次IOC総会（ミュンヘン）で1964年東京オリンピック開催が決定
1960	ローマ大会で小野喬ら男子体操が団体総合金メダル、オリンピック5連覇の第1歩を記す
1961	「スポーツ振興法」公布
1964	東京オリンピックで日本は金16、銀5、銅8のメダルを獲得して国民を勇気づけ、その後の各競技の発展を導く
1972	日本初の冬季オリンピックを札幌で開催。70m級ジャンプで「日の丸飛行隊」が金、銀、銅のメダル独占
1980	米ソ対決の冷戦下、JOCは日本政府の意向を受け、モスクワオリンピック不参加を決定
1987	第1回オリンピックデーランを札幌市で開催
1991	JOCが日本体育協会から分離独立
1992	JOC機関誌「OLYMPIAN」創刊
1996	JOCホームページを開設
1997	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 「JOCの将来にむけて」発表</li> <li>• 第1回オリンピックコンサート開催</li> </ul>

西暦	主なできごと
1998	長野冬季オリンピック開催。日本は金5個を含む計10個のメダルを獲得
2000	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 国が「スポーツ振興基本計画」策定</li> <li>• スポーツ振興くじ (toto) 発売開始</li> </ul>
2001	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 国際競技力向上戦略「JOCゴールドプラン」策定</li> <li>• JOCがスポーツにおける男女平等を目指すブライトン宣言に署名</li> <li>• 日本アンチ・ドーピング機構 (JADA) 設立</li> <li>• 国立スポーツ科学センター (JISS) 開設</li> </ul>
2004	アテネオリンピックで日本は金メダル16個を獲得、金メダルランキングで世界5位に躍進
2008	ナショナルトレーニングセンター (NTC) が東京都に完成
2010	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 「JOC Team Japan ポリシーステートメント」制定</li> <li>• 14～18歳の競技者がオリンピック精神を学びながら参加するユースオリンピックが創設され、シンガポールで第1回大会を開催</li> <li>• 国が「スポーツ立国戦略」策定</li> </ul>
2011	<ul style="list-style-type: none"> <li>• JOCが財団法人から公益財団法人に移行</li> <li>• 「スポーツ基本法」施行</li> <li>• JOCと日本体育協会が創立100周年記念式典を開催</li> </ul>
2012	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 国が「スポーツ基本計画」策定</li> <li>• ロンドンオリンピックで初めて参加全NOCに女子選手が含まれた。日本は過去最多の38個のメダルを獲得</li> </ul>
2013	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 第125次IOC総会 (ブエノスアイレス) で2020年オリンピック・パラリンピック大会の東京開催が決定</li> </ul>
2014	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 本冊子「JOCの進めるオリンピック・ムーブメント」作成</li> </ul>

## **JOCの進めるオリンピック・ムーブメント**

発 行 日：2014年5月13日

編集・発行：公益財団法人日本オリンピック委員会

発行責任者：会長 竹田 恆和

印 刷：ホクエツ印刷株式会社

写 真：フォート・キシモト

アフロスポーツ, AP/アフロ, ロイター/アフロ

